

日本統治期台灣文學
日本人作家作品集

第五卷「坂口禰子・中山侑・川合三良」

中島利郎編

綠蔭書房

日本統治期台灣文學
日本人作家作品集

第五卷「坂口禰子・中山侑・川合三良」

中島利郎編

綠蔭書房

凡例

- 一、作品のオリジナリティをできる限り生かすために影印版にした。ただし体裁の統一をはかるために、原本のノンブル、柱、囲み罫の一部は削除し、新たに復刻版のノンブル、柱をいれた。
- 一、復刻版の判型は四六判に統一した。そのため判型にあわせて、一部の作品については、原本を適宜、縮小・拡大使用した。
- 一、原本中の広告は作品と関係ないものは削除した。
- 一、各作品の発行年月日、掲載誌・掲載書、掲載頁等の初出一覧を各作家の作品末に付した。
- 一、小説、随筆等の分類を目次の各タイトルのあとに付した。
- 一、坂口繆子・中山侑・川合三良の作品解説および著作年譜、著者略歴等は各作家作品の巻末に掲載した。
- 一、作品の収録にあたっては、著者及び著作権継承者の承諾を得た。

目次

第五卷「坂口禰子・中山侑・川合三良」

坂口禰子

鄭一家(小説) 9

微涼(小説) 61

灯(小説) 89

曙光(小説) 113

時計草(小説) 145

〈参考〉時計草(小説) 149

遺書(小説) 221

孟蘭盆(小説) 235

川は流れ止まず 父母に代りて記す(小説) 257

作品初出一覧 267

中山 侑

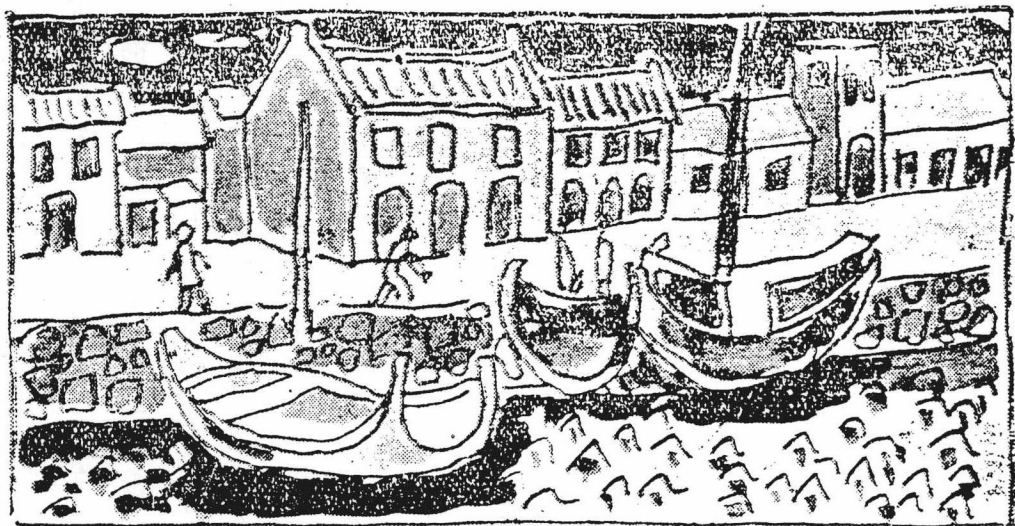
青年と台湾(一) 芸術運動の再吟味(評論) 271

青年と台湾	(二)	新劇運動の理想と現実	(評論)	276
青年と台湾	(三)	新劇運動の理想と現実	(評論)	286
青年と台湾	(四)	新劇運動の理想と現実	(評論)	292
青年と台湾	(五)	新劇運動の理想と現実	(評論)	299
青年と台湾	(六)	新劇運動の理想と現実	(評論)	304
青年と台湾	(七)	文学運動の変遷	(評論)	312
青年と台湾	(八)	文学運動の変遷	(評論)	318
青年と台湾	(九)	文学運動の変遷	(評論)	325
青年と台湾	(十)	文学運動の変遷	(評論)	332
ある抗議(創作)				337
客間	三幕・第一幕	(戯曲)		355
客間	三幕・第二幕／第三幕	(戯曲)		369
流れる雲	三幕	(戯曲)		389
午後の雨	一幕	(戯曲)		413
作品初出一覧				429
川合三良				
転校(小説)				433

或る時期(小説)	443	
出生(小説)	457	
婚約(小説)	467	
一つの縮図(小説)	477	
襦袢(小説)	511	
康吉と増子(小説)	525	
家のない家主(小説)	543	
作品初出一覧	553	
坂口樗子作品解説		中島利郎 555
坂口樗子著作年譜(戦前)		中島利郎編 565
中山 侑作品解説		中島利郎 581
中山 侑著作年譜		中島利郎編 585
川合三良作品解説		中島利郎 611
川合三良著作年譜		中島利郎編 617

坂口
禰子





鄭一家

坂口 禊子

(一)

幅廣い道である。

片側の埤圳の泥水が、情ない程水が枯れてゐるので、仕様ことなしにドボくと、澱んだり流れたりしてゐる。雨期には、あふれる程水量が増して、ひどい早さで渦を巻いて流れるのであるが、今は、砂土の盛上つてゐるのが見えて、ずねあ 田仔の追ひ込んだ水牛が一匹足だけ水につけて、岸の草を食べてゐる。

片側はすぐ甘蔗畑で、丈高い甘蔗の葉末が乾いた音を立て、風に騒いでゐる。この頃の南風のたてる砂ほこりで、芯はシャンとしてゐるのだが、葉っぱに眞白く砂が積つてゐるので、いやに疲れて見える。

普段は、附近の部落からE街の市場に買物に行く男や、ずねあ 田仔が、豚肉や、魚や野菜を、芭蕉の繊維をさいてこしらへた細い紐でくくつて、地に引づ

るやうにして通る道である。E街から共同墓地へ通じるこの道は、葬式の行列より外には、興味のある見物をした事がない。否、それは、この三十年程の事で、かつては、E街の郡役所や、警察をおそつた土匪が、裸足で、手に手に兇器を光らして走つた道である。道は、哀愁の涙に倦み、悲哀のゼスチュアに退屈して、容易な事では目を覺まさない倦怠をみせて、ながくと西から東へ延びてゐる。

が、今日は、目を覺ました。初めもの憂さうに半眼で見たが、次に大きな目を見はつてしまつた。

行列が通る。葬式の長い列がゆく。西から東へ、寒天のやうに重々しい空氣をかきわけけるやうに、自信のある華々しさで、そこら邊りを、振動さしてゆく。

……久しぶりだ、こんな行列は、何家の葬式かな……と、道は、やをら身を起す。

猪羊チイウ（一疋の儘丸煮した豚と羊を臺に乗せ各二人で擔ぐ）開路神カイロオシマ（道を開拓してゆく神で惡魔を拂ふ神である。紙で作つた三米位の人形で、腹中に豚の臓物を吊してある）の次に、白旗に故人の名を書いた銘旗が行く。

「……鄭朝……」と讀める。

鄭家の葬式である。

音樂團がゆく。ドラや太鼓や、笛で、哀調を帯びたマーチを奏してゐるのであるが、臺灣從來の音樂に耳を訓練されてゐない者には、それが、騒々しい雜音であるとしか聞きとれない。ドラも太鼓も随分遠く迄聞える程叩かれる。

何時もフォルテなのである。笛は、この樂器の持つ自らの哀調を失しなわす、それでも突然、フォルテツシモで、空に向つて突かゝるやうな氣まぐれである。樂器の一つ一つが、自分の存在を最明瞭に印象づけやうと競争でもしてゐるやうに我鳴りたて、響き合ふ。夥しい弔聯や軸、花輪、二十四孝を像どつた藝閣山車が、悲哀とは縁遠い華やかな色彩をまき散らしてゐる。司公サイゴン、和尚ヘンシウが、靈柩の前を、讀經をしながらゆく。司公は、行列の中で、一番眞剣な顔をしてゐて、おかしい行列だと、道にとび出して見物に來た若い内地人の娘も、その深酷な表情には齒がたゝぬ。棺木は、同姓の人達二十四人が、代り合つて擔いでゆく。傍に、左右から支へられて、號泣してゆくのは息子の樹虹であ

る。頭には、藁草の帽子をかむつて、麻の喪服を着てゐる。樹虹は父の死をこんな道化た形で表現したくない程、心から傷んでゐるのであるが、今は、むしろその形から、子供のやうに素直な悲しみを感じてゐるのである。後から、孫の樹一郎が、やはり父と同じ服装で、どこか氣の抜けた風でつゞいてゐる。

女達は、一般會葬者の最後の人から二百米も離れてしまつて、引男の引く長い布につかまつて、「哀啊、哀啊」と泣叫んでゆく。鄭朝の妻の鄭江氏玉、樹虹の後妻の若い鄭周氏翠霞、後に、樹虹の娘達球子、路子、阿紀子がつかなければならぬのだけれど、娘達はまだ稚いので、家に残つてゐる。

若くて、インテリの翠霞は、もういゝかげん馬鹿くさくなつてゐる。こんな大仰な葬儀つて、一體、死んでいつた家官にとつて、どれだけの供養になるのであらうと思ふと、涙も浮べないで、唯上手に泣聲をたてゝゐる一行の者のやつてゐる事が、我慢出来なかつた。夫の樹虹も、さぞ苦々しいであらうと、ふと思ひやるのである。すると、その後に従つてゐる筈の樹一郎の面影が浮び上り、思はずハツとし、あわてゝ大きな聲で、「哀啊！」と叫んだ。然し、自分のすぐ前を、姑の玉が、肥つた體で、太儀さうにそうくゝと纏足の小さい足でヨチ／＼歩いてゆくのを見ると、又ふつと微笑がのぼつてくるのである。

姑は、自分の最愛の夫の葬ひであるのだから、よし、この四五年、殆ど部屋を一つにしなかつた老夫婦であつたとしても、過去の永い楽しい思ひ出にだけでも、こんなに號泣して哀しむ由れはあつた。でも、肥つた體から惱に突上つて聲になるやうな透き通るやうな細いソプラノが、肉食をつゞけた者の持つ、衰へない精力を思はせて、翠霞は、何か生臭い性慾的なものを感じ、ベツと唾を道に吐き出した。

「哀啊、哀啊」悲しみのコーラスが、白い路に影を落して、ほこりつぽい地面から、むくむくと妖氣が立上るやうな幻覺である。陰氣さは少しも濕つぽい空氣を含まないで、からりと乾いた豆莢のふれあふやうなよそ／＼しいものが颯々と吹き抜ける。

非常にうまい俳優になつたやうな、客觀的さで、行列に加はつてゐる翠霞は、玉が、フンと手鼻をかんで汚れた指

を靴になりつけ、又、「哀啊」と叫ぶのを見ると、玉も、たいして悲しんでゐないのだと、ホツとし、氣が抜けたやうにがっかりした。

翠霞は疲れきつてゐた。翠霞だけでない、鄭家の人々は皆、もう鄭朝の死と言ふ現實を過去帳の中に繰りいれてしまつてゐた。

殯殮四十九日で、今日のこの豪華な葬式になつたのであるが、四十九日の哀悼も、終にゆく程、無理強ひに強ひられる氣持で、今日の葬儀迄、初めの生々しい感傷を持ちつづけた者は一人もゐなかつた。

然し、泣かねばならぬ。叫ばねばならない。儒教の禮から來てゐるこの風俗は、道教が入り佛教が加はり、通俗な人間の弱點に喰入つた陰陽家、地理師の爲に、特殊な俗體となり正禮から遙な所をうろくしてゐるのである。

生前どんなに親不孝をしても、立派な葬式さへすれば帳消しになると言ふ、とんでもない所へとんで、中味の何にもない、空虚な形式主義を暴露してゐる。

行列は、墓地へのろくさい歩みをつづけてゐる。因習の重みに疲れたやうに……。

(二)

鄭朝は鄭家の前當主であり、同時にE街の前街長である。

鄭家は、朝の父鄭梧桐の時代に、巨萬の富を築き上げ、朝が持前の好人物を買はれて名譽を擲んだ。父子二代で富と名譽を兼ね備へたのである。

臺灣の富豪には、必ず傳説が伴ふのであるが、鄭家にも傳説がある。これは梧桐の性格を語つてゐるともみえるが、かう言ふ傳説をつくり上げる本島人の性格であるとも考へられるわけである。

梧桐は對岸の厦門の商人と、盛んな貿易をやつてゐた。清朝の末期で、海上には海賊が横行しやうと言ふ時である。彼等の船も幾度となくその危險にさらされたのは言ふまでもない。然し、豪毅な梧桐はよくそれを切抜け、彼等の積

荷は、一回も奪はれた事がないと言ふ誇りを持つやうになつた。彼の持船、彼の指揮する船は、媽祖の加護を特別受けてゐると思はれた。

或時、彼の指揮する船は、厦門から東の方を指して順風に帆をあげた。が、かつて人爲的な禍害を受けた事のなかつた梧桐の船も、南支那海の真中で、天然の猛威の試練を受けねばならなかつた。

船は嵐の中に卷込まれたのである。眞黒い雲からしたゝり落る大粒の雨が甲板を叩き、吹き下す風が、すさまじいうねりになつた波と共に、船を右に左に、上に下に翻弄した。乗組は、三十人ばかりであつた。彼等は「アイアア、アイアア」と叫びながら自然の猛威の前にひれ伏してなす所を知らなかつた。目をつむつて船の最後を待たうとした。と、「積荷を捨てろ、積荷を捨てろ。」彼等のどこかゝら目に見えないさゝやきが起り、さいなみのやうに、乗組員をひたしていった。彼等は敢然として梧桐に迫つた。

「積荷を海へ捨てろ」

梧桐は動かなかつた。彼は天の一方を凝然とにらみ、何事か期するところがあるやうに見えた。

「待て、一時間待て。一時間たつて嵐が止まなかつたら積荷を全部棄てやう。」

そして、彼は甲板にひさまづいた。ザザアツと波は甲板を洗つたが、彼は恐れる氣色もなくひさまづき、小さな聲で祈り初めた。

「媽祖よ。我等が船を救ひ給へ。我等が積荷を救ひ給へ、我等が生命を救ひ給へ。媽祖よ、若し我等を救ひ給へば、故郷に安着の折は、廟に黄金の燈籠を寄進しやう。媽祖よ、救ひ給へ。」

祈りはきかれた。船も積荷も救はれたのである。そして梧桐は、又々その積荷により富を増した。梧桐は、當然、黄金の燈籠を寄進せねばならなかつた。そこで梧桐は寄進したのである。然し、現在のE街の合興宮の見事な燈籠がそれではない。梧桐が寄進したのは、掌に入つてしまふ程の可愛らしい燈籠であつた。だが然し、燈籠には違ひなかつた。梧桐は大きき迄媽祖に約束したのではない。若し天上聖母が、約束不履行の訴へをしやうとしても、それは聖母

の方が無理である。梧桐は約束は、ちゃんと果したのだから。

この鄭梧桐の傳説は少からず朝の自尊心と誇りを傷つけた。朝は、梧桐がなくなると、まるで、冥土へ行つて父が媽祖に叱られてでもゐるやうに、大いそぎで見事な現在の燈籠を寄進した。合興宮に參詣する人々は、一度必ず天井を仰ぎ、「フファン」と笑ふのが常である。それは、一生、鄭家の富と名譽に壓迫されてゐる感じを、鄭家を輕蔑する事で、ほんの一寸優越感を感じると言つた形である。

豪毅大膽、そして狡猾な梧桐の後繼者としての朝は、凡そ父とは違つた性情で、應揚に育つた大家の風采を具へてゐた。臺灣が、日本の政治下におかれ、着々として皇民的訓練が彼等の生活に喰入つてゆく時、保守的であるべき筈の富豪の朝は、最率先して日本的なものを受入れ同化しやうと努力した本島人の一人である。それは、或は、當事者の甘さに媚びやうとするゼスチュアとも思はれたが、彼の努力は、眞劍であつた。

國語を習ひ、一生懸命で使つた。妻の玉には日本式の料理を習はせた。着物を着た。時には右を上前に着てるやうな事もあつたが、式服さへ和服を描えてゐた。家の中に疊を敷き、座る生活もやつた。然し、幼い折からの生活が、彼の座りなれない足を痛め、食べなれない料理には満たされなかつた。それでも尙、彼は努力したのである。彼が一人息子の樹虹を内地に早くから手離し、教育させたのは、自分に成しとげられなかつたものを、子供によつて成就しやうと言ふ彼の祈りであつた。

朝のひたむきなものには、一應誰でもが打たれた。然し、どうしても「ダ行」の發音と「ラ行」とが區別出来ないことや、餘りに獨善的な彼の態度が、時に滑稽でさへあつた。

「さあ、ろうろ、ろうろ、おかけなさい。」社交的な本人の性格から、朝は誰にでも氣輕で愛想がよかつた。眞圓い顔で、上下にも左右にものびた圓い體で、彼の體付が、すでに如才なさを表してゐた。

「ろうれす。近頃の暑さは。實際。やりきれませんね。」眉をひそめて大仰な身振りをする彼の顔を見てゐると、誰もが微笑せずにはをれなかつた。小さな目と、チョツピリ盛上つた鼻は、左右の丘になつたほつべたに網張りを浸さ

れてゐたが、それでも在る事を疑ふ程丘の中に没してはゐない。小さい口と、髯のない顔。彼は童顔を失しなつてゐない。

「氷がいますか。或はお茶？」直譯のやうな口のきゝ方をする。そして、「或は」を連發するのである。例へば、「貴方、明日臺中へ行きますか？或は行きませんか？」「赤ちゃんがお産れになつたさうですね。おめれたう。男の子ですか、或は女の……」とかうである。

然し、朝は、玉に國語を使はせる事には失敗した。玉は國語を覺える事は置いて、内地人の人々の間へ出たがらないのである。この事は、皇民化に努力してゐる朝の最不滿な事である。然し、玉は、自分が纏足してゐる事を口實にして、どうしても外へ出やうとしないばかりか、お客様に御挨拶に出るのさへ、内地人の場合は嫌がつた。どうしても出て行かねばならぬ時には、あきらめて、部屋から召使ひに助けられてヨチ／＼と應接間に出て來た。巧みな表情で、「今日は。」「ゐらつしやい。」「ろうろ。」「さよなら。」「又ゐらつしやい。」「こんな簡單は幾つかの言葉で、何とか胡魔化してしまつた。玉に話しかける人が殆どないのが都合がよかつたし、あつても、わかつてゐるやうな顔をして、ニコ／＼笑ひ時々うなづいた。話手は、相手に意が通じたと思ひこんだ。

朝は、極力玉に國語を習ふ事を強ひるのであるが、玉は、自分の頭腦が、さう言ふ事を受入れる餘地のない事を訴へ、頑固であつた。そんな事で、朝は玉に話しかける時には、いやでも臺灣語を使はなければならなかつた。ところが、彼の神經は、このだん／＼脂肪の魂りのやうに太つてゆく玉に對して、臺灣語で話しかける時、彼の内地化したと信じてゐる自分の生活態度や言語への誇りを、傷つけられるまい／＼しさを感じるかと言ふと、さうではなかつた。むしろ和やかな休息を感じるのである。ホツとするのである。故郷へたどりついたエトランゼーの氣安さを感じ、彼が常に肩をはつてゐるポーズがくづれ、安堵の表情になるのである。

これは、朝には不可解な事であつたが、彼の理性は、それを本來の自分の自然な姿であると見極めるには鈍であつた。そして、彼は多くの召使ひが、彼の面前でだけ、オド／＼と四苦八苦して國語で用を足さうとするのを、得意と

満足とでうなつくのである。

或時、さる高官の方がE街を訪問された。朝は欣然としてこれを迎へ接待した。話がたま／＼皇民化の事に及ぶと、彼は満面に微笑をたゞへて言つた。

「私は、臺灣語を内れも外れも使はないのを誇りとしてをります。皇民化は、國語を徹底させる事につきると思ひます。こいつらの本島人は、殆ろ官廳では、國語をつかつてをりますが、これれ一步家に入ると、もう臺灣語れ話します。正廳の屏が、その境界になるのれす。こんなのは、感心しません。實際。或はさうれない人もあるれせうが。」

高官は、朝の顔を微笑しながら眺めてゐたが、黙つてうなづいた。稚氣愛すべきこの男の風格を讀取つたと言ふ意味であつたが、朝は、自分の立場を肯定されたと思つた。

やがて、高官の歡迎會の晚餐會が、E街のホテルで催される事になつてゐて、一同、ホテルにハイヤーをとばした。會場には、臺灣料理の用意がしてあつた。

「おい」、朝は眉を寄せて助役を振返つた。

「一體、これはどうしたのれす。あれ程、日本料理らと言つといたのに。」彼は故意に高官に聞える程の聲で言つた。自分の落度でない事をみてほしい氣持であつた。

「これは、〇〇殿が……。」助役の言葉をさへぎつて、高官が言つた。

「いや、失禮。これは、僕が、注文したんです。晚餐會と言ふお話でしたので、どうせ御馳走になるのなら、僕は臺灣料理がいゝねつて、蔡君にたのんだです。E街のこのホテルの臺灣料理はうまいと聞いてゐたもんですからね。どうも、失禮。」

朝は顔を赤くした。そして何か胸につかへるものゝあるやうな氣持で席に着いた。

美妓が席に現れて接待を初めた。臺灣服を着た美しい本島人の妓達は、脇から腰にかけての線が素晴しく美しかつた。肩から華奢な兩腕への圓味を帯びた線、兩腕はまるだしになつて薄桃色に化粧されてゐる。まるでそれ自身生物